

2. 初期のものの方が脾へのとり込みが多いような印象は受けました。

質問： 立野 育郎(国立金沢病院 放射線科)

^{131}I -MIAA の RI ratio の重なり合いの少ないのは、粒子サイズが比較的均一であるからと考えてよいでしょうか。

答 今枝 孟義(岐大 放射線科)

^{131}I -MIAA 粒子の形、大きさが均一であるためと、その大きさが肝と脾の RES 噴食能に適しているためと思います。

*

9. 経過観察としての肝スキャンの重要性について

利波 紀久 森 厚文 久田 欣一
(金沢大学 核医学診療科)

肝スキャン依頼の動機にはいろいろとあるが、その一つとして経過をみたいという場合がある。今回はこの経過観察における肝スキャンの持つ有用性について興味ある症例を供覧し紹介した。

肝スキャンが有用と考える場合は次のごとくである。

- ① 急、悪急性肝炎、慢性肝炎、肝硬変などの経過観察、予後判定。
- ② 原発巣が判明しており肝内転移の疑われる場合の経過観察。
- ③ 肝内限局性病変の良、悪性の鑑別のための経過観察。
- ④ 肝外病変による肝異常形態の手術前後の比較。
- ⑤ 肝悪性腫瘍の治療による経過観察。

以上の項目を10症例を供覧し解説したが、肝スキャン読図者にとっても経時的に肝スキャンが施行してあれば診断もまた比較的容易な場合も少なくないことを最後に強調した。

*

10. RI イメージ・データ解析へのライトペン の利用

小島 一彦

(金沢大学 放射線技師学校)

久田 欣一

(同 核医学診療科)

データ処理装置 CDS-4096 にライトペンの接続を試み、その動作および応用について検討した。図形処理での man-machine system としてのライトペンの使い方には picking すなわち画素を抽出してその内容をしらべ、さらにそれをデータにして計算する方法と tracking すなわちライトペンで CRT 面上に図形を描こうとする方法がある。ここで用いたライトペン装置の原理も一般のコンピュータグラフィックスのものと本質的に差はないが、文字発生器がないため、CRT 面でのプログラムの選択はできなく、しかも固定プログラムである点限定されている。イメージは64×64点で形成され、テレビの場合と同様にXとY各々の掃引電圧によって走査されている。いまある位置にライトペンを指示すると輝点の光はライトパイプをへてホトマルに入り、電気信号に変換され、位置信号をえらぶゲートの働きをする。このゲート信号でえらばれた位置のコアメモリーの内容およびアドレスが抽出できる。一般には4領域が設定でき、それぞれの領域のアドレス数カウント数の算出により、臓器別の RI 集積量の比較や腫瘍部位の集積量などを知ることができる。また紙テープ出力との組み合わせで同時に領域別の動態機能がしらべられる。さらに off-line でしかできなかった多段階の isocount 表示も、カウント分布にライトペンでレベルを指示することで、on-line でも可能となり、応用範囲が広がった。

質問： 立野 育郎(国立金沢病院 放射線科)

一言で Split area の高度化したものと考えてよろしいでしょうか。

答： 小島 一彦(金大 放射線技師学校)

一般的にはそうですが、本体の機能との組み合わせにより、種々の使い方ができます。

*